

卒業・修了の諸君へ



学長 佐々木 慎一

未曾有の不況、それも早晚恢復する見込みのない状況下新たに社会人となろうとする人々、さらに進学して勉学を続けようとする人々、いずれもが例年にない緊張感をもって、卒業・修了の場に臨まれたことと思う。

つくられた異常景気の崩壊で産業は冷えてしまった。日本はもの作りの産業をととして工業立国し今日の繁栄を勝ち得た。もの作りはまさに産業の基幹をなすものだ。これを冷してはならない。冷したままに推移せんか、もの作りの據点はますます国外へと移り日本の産業は空洞化してしまう。このようなとき祖国再建の担い手として世に出てゆく若い活力に充ちた諸君に寄せられる期待ははかり知れぬものがある。さてその産業であるがこれまでの産業分野（機械産業、電気産業、化学工業等々）の分類は今後にむけて大きく変わろうとしている。それはこれまでの分類を遥かに超えた環境、健康、教育、文化という新しい軸のフロンティアが展げつつあるからだ。これまでに学んだものを大切にすることはいうまでもないが、学んだことの枠を超えた業際的な産業が重要視される世になることを意識しつつ自分なりの行動規範をもって頂きたい。

いま諸君は自分の将来について思いをめぐらし人生設計を模索していることと思う。自分の将来はどうありたいか壮大な夢を描かれたし。その夢をただの夢に終らせまいがためには具体的な行動計画が必要である。計画は10年刻みでも宜しかろうし、人生を1期、2期、3期と区切るのも宜しかろう。そして各刻み目ごとの目標にむけて鋭意努力するのである。学問・研究の精進、体力の練磨、初心に戻っての語学・数学の勉強、わが身の幅を拡げ技術者に必須の文系の素養を身につけんがための読書等いろいろの事柄が目標達成のために考えられよう。努力はこれを継続されたい。継続は力である。そしてそれによって得られた知識はさらに強大な力である。怠惰であってはならない。目標は時に到達できぬことがある。努力してなお目標に到達できぬことで人は名誉を失わない。怠惰に流れ無為に終わったとき人は名誉を失うのだ。近頃の若者たちの中に醒めた考え方をするものが多いのを憂う。自分はどうせこの辺どまり、あとは適当に世を過せばいいさという風潮を憂う。熱い願望のもと夢を追い続けければ何事にまれ自ら納得できる域には到達できるのだといたい。Man is mortal. 誰しも死に直面す

るときが来る。そのとき「これが生だったのか。よし！それならもう一度（ニーチェ）」といえる人生を創りたまえ。

大学院へ進み或は社会に出て自分で研究の或は開発のテーマをきめようとするとき次の三原則は如何であろうか。そう簡単に出来そうもないこと、きわめて困難を伴いそうなこと。誰もやっていない或は誰も顧みようとしないもの。出来上がったものが直接人の世に益をもたらすものであること。簡単に出来そうなのは他に譲ればよろしい。いまハヤリの研究とやらで多勢の人がやっていることに首をつっこむことはない。工学者、工業技術者の仕事は出来上がったものが人の世の役に立たなければ困る。但し成果を人の世の役に立てようとするとき十分なアセスメントを必要とする。事前のアセスメントなしに便利さのみに眼を奪われて実用に供した技術のうち、人に環境に地域にいい知れぬ害を与えたものが如何に多かったことか。生きとし生けるものの共生と人の作ったものの合理的な循環はこれからの技術開発の根本理念として脳裡に刻まれねばならない。十分なアセスメントなしには共生と循環は保障されぬものと覚べし。

技術立国は日本に空前の繁栄をもたらした。ただこの間、物質文明を追い求めるなかで人はころをどこかへ置き去りにしてしまったのではないか。人はモノとカネさえあれば仕合せだと思って今日に来てしまったのではないか。ころを失ったといわなければならない一つは倫理観の喪失である。ここ数年来の政界、財界の動きを至極残念に思う。収賄贈賄ということが大手を振ってまかり通っている。曲ったことには手をかさぬという倫理のころを終生もちつけて頂きたい。ころを置き去りにしたといわざるを得ないもう一つは、モノ、カネの奔流のなかで自分さえよければ人はどうでもという風潮の弥漫である。隣人への思いやりの気持がきわめて稀薄になってしまったのではないか。人はどうでもよそごとはどうでもという風潮は国を思い国を愛する気持の衰退にもつながっている。若い人々の中に祖国への誇りと愛を失ってしまった人の少なくないことを歎く。人を思い住む町を愛しそして祖国を大切に思う、そんな平凡なころの復帰を願ってやまないのである。

風雨強かるべき大海原へ船出せんとする諸君の活躍と発展を願って卒業・修了のことばとする。